
恋人繋ぎ。

富和 実里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人繋ぎ。

【Nコード】

N0781V

【作者名】

富和 実里

【あらすじ】

昔、大好きだった、隣の家の男の子は誰・・・？
引越してしまった、男の子兄弟が、帰ってきた！！

1 再会

「寒いよお。」

私は、道端でしゃがんでうずくまっていた。

道が分からなくなつて、もう何分経つたのだろうか

幼い私はただ、あの人の名前を呼ぶだけだった。

いちしか雪がちらほらと降り始め、辺りは真っ白。

上を見るとねずみ色の大きな雲が光を遮った。

泣き喚く声は、響きもせず、虚空に消えていくだけだった。

もう、私は死んじゃうんだ…。

そう思ったとき温かい何かが私の頭を撫でた。

「…見つけた…」

私をきつく抱きしめた男の子は、息を切らして、呟く。

「…僕の傍から離れないでね」

そうだ。この男の子を私は好きだった。

いつも一緒に過ごしていた、隣の家の男の子。

私が足をもつらせて、こけると男の子は優しく笑って手を差し出した。

そして、泣きながら、男の子と恋人繋ぎをして帰った。

いつも一緒に歩くときは恋人繋ぎ。

そういう法則が私と男の子の間で出来たりもした。

『恋人繋ぎをするとね、ずっと一緒にいられるんだよ!』

『じゃあ、ずっと一緒にいていようね』

『うんっ』

男の子は、笑顔が素敵で、遅しかった。

そう、名前は……

バンッ

大きく机を叩く音が耳元でした。

「…はっ」

「紀野^{きのの} 風香^{ふうか}！！！俺様の授業で寝るとは良い度胸だな…」

「ひっ、ごめんなさい…尚ちゃん…」

俺様で偉そうな先生は神宮^{じんぐう}尚人^{なおと}先生。
通称、なおちゃん。

数学の先生であり私のクラスの担任。
ヤンキーっぽいけど、すごく面白い先生で、熱心な先生だから、みんなから好かれている先生。
私自体も、結構お世話になってて、信頼できる先生だ。

そんな先生が、私が寝ているところを起こすのは恒例となっていた。
みんなの笑いがクラスで起こる。

「もう、起こしてよー、莉乃お」

「起こしても起きないじゃない」

私の隣に座る三月莉乃^{みつきりの}は、私の親友。
ツインテールが目印の可愛い子だ。

私が莉乃と口論していると後ろから痛みが走った。

「いったあああ」

私が大声をあげると、尚ちゃんは私の頭をくしゃくしゃして、罰だよって笑った。

「うう…」

「よし授業続けるぞー。だからな、この問題はー…」

私は改めて真剣にノートを写そうとすると、隣の莉乃から手紙が回る。

”何か、尚ちゃんと風香良い雰囲気だね（*、*）禁断の恋つてやつー？”

「…なっ」

私はバツと莉乃の方を向くと、莉乃はそっぽ向いて、ノートを書いている。

でも…好きとかそんなんじゃないけど、何故か最近、尚ちゃんはよく私に絡んでくる。

朝会ったら、元気か？とか、調子はどうだ？とか。

先生だから当然なんだろうけど…。

私がじつと、先生を見つめていると、バツと目が合った。

「えっ」

「紀野。この答えは何か分かるよな？」

「え、えっとー…」

くああ、話聞けばよかった！
全然分からない…。

先生は溜息をつく。

「ちゃんと、集中しろよ！ たく…じゃあ、三月。お前は分かるか？」

莉乃はスラスラと答えを言う。

やっぱり、違うに決まってる。

勘違いだ。

私もまた、心の中で溜息をついた。

学校も終わり、家に帰ると、いつも母親が元気におかえりーという
声が聞こえなかった。

妙な静けさで少し怖い。

「おかあさん」

大きな声で呼んでも返事はなし。

リビングに向かうと、一つの手紙が机の上に置いてあった。
私は息を飲む。

” 隣の家に行ってください ”

1行。

「・・・は？」

私は玄関を駆け抜けた。

そして隣の家を見ると、明かりがついている。

隣の家は、前まで、おじさんとおばさんが住んでて、最近引っ越したはずなのに・・・。

どういうこと・・・？

私は怪しみながらも、チャイムを鳴らしてみた。

「はいはい、ちょっと待ってね」

男の人の声！？

胸がバクバクと打つ。

バツと勢い良くドアが開いた。

「いらっしゃーい！風香ちゃん」

気の良さそうなお兄さんが出てきた。

「ほえ…?」

「どうぞどうぞ、入って!」

「は、はい?」

「良いから!」

強引に手を引かれ、家に入った。

懐かしい感じがした。

そうだ、この家。

昔何回も行った。私の大好きな男の子がいたから…。

私が見回していると、廊下やら階段から、足音がたくさん聞こえてきた。

「へ…へっ!?」

「風香だ!!!」「ふうちゃんだあ」「風香ちゃんじゃん!」「お
お風香だ」

男の子が4人で私の前に現れた。

もうすでに、私は男5人囲まれていることになる。

「何で…私の名前…?」

冷静なかつこいい子がボソツと呟いた。

「覚えてないのか」

「覚えてないのかって…会ったこと、あるの!?!」

「こんな、かつこいい男の子たちに出会ったことがあるはずない!

「神宮。って苗字、覚えない?」

「尚ちゃんの苗字…?」

「昔の話。10年前ぐらい、隣の家にいたでしょ」

「…あ、あああ!!! いたいた!!! 男の子の大兄弟でしょー」

「帰ってきたんだよ」

私の肩を掴んで、茶髪の男の子は微笑んだ。

2 隣の家の男の子

まさか。

まさかまさかまさかつつ

私の隣の家には、前引つ越してしまった大兄弟が戻ってきた。

どうやら、母は神宮家の母である玲子さんと神宮家で久しぶりのお茶タイムをしていたらしい。

「風香と会うの何年ぶりだろうなあ。俺もう大学3年だぜ」

私の隣に座る茶髪で大学3年の次男、たいき太希。
昔と全然性格は変わっていない。少しやんちゃっぽく、元気な男の子。

でも顔はかなり変わったけどね。

「俺、かつこよくなつたる？」

「あはは、そうだね。すごく変わった」

太希は少し顔を赤くして、私の頭をクシャクシャした。
少し私の前を歩いていた太希。

「まったく太希兄さんはすぐ顔を赤くするんだから
三男で大学1年の優^{ゆう}は、私に笑顔を向けて言った。
一つ上のお兄さんで、いつも私と本を読んでいた。

「わあ、優も変わったね。」

「そうかな？」

「うん！何か大人っぽくなったよ」

色素の薄い髪に整った顔立ち。

昔から、かっこよくなるぞーって世間の人からも言われてたから、
まさに予想通りだった。

落ち着いた雰囲気もそのままだった。

「ええと、蓮…久しぶり」

「…ん」

私と同じ年で高校2年、四男の蓮^{れん}。

黒髪でピアスもしてて、少し怖い雰囲気になっていた。
小さい頃から無口だったのは変わらないけれど。
でも、顔はかっこよくなっただし背も高くなった。

「変わってないな」

「…そう？蓮も無口は相変わらずだね」

「うるせえ」

「もっつゝ、ふふ」

「…なんだよ」

少し照れたように、そっぽ向いてしまった。

やっぱり、変わってない。

少し嬉しいような…。

「風香あ、ジュースでも飲むか？」

冷蔵庫を漁っているのは、五男で高校1年の竜りゅうだった。

「ありがとっ、もらっ！」

竜はにこやかに持ってきて、私に渡す。

そして、少し怪しい笑みを浮かべて、私の手を握ってきた。

「…？竜？」

「可愛くなっただね」

「なっ…顔近い…」

竜は手を離して、自分の部屋へと戻るようだ。
何だったの…？

「竜には気をつけなよ。最近、あいつ女癖悪いんだ。まったく…毎日のように女、部屋に連れ込んでさ」

優は机の上のジュースを飲み干して溜息をついた。

「そうなんだ…」

変わっちゃったんだ…。

前は、女の子に、悪口ばっか叩く子だったのに。

「でもね、竜にいね、ここに帰れるって言ったら、風ちゃんと会えるって、すごく楽しみにしてたんだよ！」

一番末っ子の洗ちゃんひかるは、まだ小学4年の可愛い子。もちろん女の子。

女の子みたいな顔で、この子は顔も甘えん坊な性格も変わってない。

「洗ちゃん！久しぶりだね、背高くなっちゃってー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0781v/>

恋人繋ぎ。

2011年7月23日11時54分発行